藤井先生を悼む

二宮まや

藤井先生の最後の御闘病の2年間，たまたま学科の人事委員の任にあった私は，先生のご病状と緊密に結ばれていた．そして冷静な先生と，まるで2人とも第三者であるかのようにその病気の話をした．奥様もいつも淡淡としていらして，実にご立派であった．

65歳の定年を延長して学科に留まって頂きたい，と教室会議で決まった夜，私はとりあえずお電話でそのことをご報告した．翌日であったか先生は私の研究室にいらっしゃり，「まことに有り難いし，自分も残る力を尽くしたいが，教室に迷惑がかかるといけないので，遠慮させてもらいたい」とおっしゃった．そのころ先生は小康状態で，4コマの授業もこなしていらっしゃった．ただ数日後に，かねてから予定されていた3か月毎の検査のため，以前手術を受けた名古屋の病院に，暫くお入りになる予定にはなっていた．そこで私は「結論はその検査の結果を見てからお出しになってもよいのでは」と申し上げた．先生がお使いになった「何しろ伏兵かいるものですから」という表現に誘われて，「敵に後ろを見せるようなことはしないでおきましょう」と思わず言ってしまったが，先生が少し弱気になられたようで胸を突かれた．折しもテレビタレント等の手術宣言，転移したら又取ればよい式の積極的闘病姿勢がもてはやされていた．——あくまでも前向きに，周囲も一緒になって，諦めないで——．私たちに出来ることは何か，と考え続け，ともかく気持ちの上では共に戦っていることをお伝えしたかったが，言葉にはならなかった．

これは10月半ばのことであった．

思えば，関西大学が私を専任に採用してくれるという話になったとき，紹介してくださった上村先生(その後九州大学へ移られた)に連れられて初めて藤井先生のお宅へ伺った．クヴェレ会でお顔を存じあげてはいたが，

これからは上司ということで私は固くなって，お座敷に続く応接の椅子に腰を下ろした．先生とのかかわりはこの時から始まった．

それから24年後の２月24日，その同じ椅子に，私はもっと固くなって座っていた．小雪が舞い，名古屋からのご遺体のご帰宅は遅れた．先生は一回り小さくおなりになったが，とても穏やかなお顔であった．戦いは終わった．C. F. Meyer の『ペスカラの誘惑』の結びが思い出された．

Der starke Wille in seinen Zügen hatte sich gelöst, (.....). So glich er einem jungen, magern, von der Ernte erschöpften und auf seiner Garbe schlafenden Schnitter.

藤井先生には本当にお世話になった．折りある毎に引き立ててくださるのがよくわかったが，何しろ怠け者で自信も欲もない私は，半分迷惑そうな顔をして，お断りすることばかり考えていた．けれども先生は，私に限らず，ご自分より下の誰彼を，常にその力に応じて適当な働きの場に推輓する事をよく考えていらした．そしてその人が引き受けたからには，もう口出しはなさらなかった．それはとても教育的だったと今になって思う．信頼されているという思いが一番人を支えるであろう．おかげで私は藤井先生の前では自由でいられた．

先生御自身は，本質は文学青年で，役職などは実は苦手とお見受けされた．にもかかわらず先生はひどく律儀で几帳面，時にはそんなご自分の板挟みになっていらしたのかもしれない．結局予想よりも早く訪れることになった停年後の無拘束の生活を，それなりにとても楽しみにしていらっしゃったとあとで伺い，納得した．思い切り文学青年に戻った日々を，しばし楽しんでいただきたかった．それは残念でならない．

「いつまでも病気でなんかいられない」と先生はあるとき，振り切るようにおっしゃったという．私たちは亡き人を偲び，懐かしみ，感謝し，その生を讃える．しかし，死者の無念ということを思うと，どんな言葉も色を失う．

藤井先生，先生の口惜しさはもうお慰めするすべもありません．

先日，日本ゲーテ協会の京阪神支部から，藤井先生の後任として幹事をやらないか，との話があった．先生にご相談したい，ととっさに思った．

「そうですか，言ってきましたか，実はあれ私が推薦したのです．引き受けてください」天国の先生はいつものようにニコニコとおっしゃった．これからも私は，何かにつけこんなふうに先生とお話をするだろう．

藤井先生，いま先生はすべてをご覧になっていらっしゃるのですね．